

令和5年度第2回

札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会

会 議 録

日 時：2024年1月10日（水）午後3時開会
場 所：札幌エルプラザ公共4施設 2階 環境研修室1・2

1. 開 会

○大沼会長 定刻となりましたので、ただいまから、令和5年度第2回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会を開催いたします。

まず、事務局から連絡事項をお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 委員の皆様におかれましては、本日、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

委員会委員の出席状況について確認させていただきます。

本日は、能登委員と福岡委員のお二人からご欠席のご連絡をいただいているところでございます。

また、今回の委員会では、本日、この会場まで来られない方について、オンラインでご参加くださるということで、松田委員と坂本委員はオンラインでつながってございますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

本日のご出席は計12名ということで、委員総数14名の過半数に達してございますので、推進委員会設置要綱第5条第2項の規定によりまして、本委員会が成立していることをここに報告させていただきます。

続きまして、議事に先立ちまして、札幌市環境局環境都市推進部長の上田よりご挨拶を申し上げます。

○上田環境都市推進部長 環境都市推進部長の上田でございます。

開会に当たりまして、一言、ご挨拶申し上げます。

委員の皆様におかれましては、お寒い中、また、年明けのお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今、寒いと申し上げましたが、寒いと聞くと、逆に、今年のとても暑かった夏が思い起こされると思います。今年の8月23日には、札幌市内で観測史上最高の36.3度を記録したということもございまして、今の寒さから考えられないような状況でございました。市内では、一昨年の2倍を超える560人以上の方が熱中症により救急搬送されたということもございましたし、学校の多くで短縮授業を余儀なくされるというように、市民生活にも大きな影響があったところでございます。

最近では、地球温暖化を超える「地球沸騰化」という言葉が使われ出してきたところでございますが、今や脱炭素への取組は待ったなしの状況となってきております。

札幌市でも、ゼロカーボンへの取組という目標達成のために、再生可能エネルギーの普及・促進、省エネルギーの徹底、そして、今、温室効果ガスを排出しない水素の普及に向けて取組を加速しているところでございます。とりわけ、次世代を生きる子どもたちへの環境教育、環境学習はますます重要になってきておりますので、教育委員会や、関係機関の皆様にご協力を賜りながら、一層の推進に取り組んでまいりたいと考えております。どうぞ今後ともよろしくをお願いいたします。

今回の委員会では、できるだけたくさんの委員の皆様にご参加いただくために、オンラ

インを併用した形とさせていただいております。先ほどももたもたしてしまいましたが、不慣れでございますので、至らない点もあると思っておりますけれども、委員の皆様には、ぜひ忌憚のないご意見を賜りまして、活発なご議論をどうぞよろしくお願いしたいと思います。

簡単ではございますけれども、私の挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 続きまして、前回の委員会にご欠席された方が多かったということと、前回から新たに先名委員と山本委員が加わってございます。

ということで、誠に恐縮ですが、前回ご欠席された委員と、先名委員と山本委員に自己紹介をお願いできればと存じます。

それでは、三浦委員、お願いできますでしょうか。

○三浦委員 札幌市立琴似中学校の校長の三浦と申します。

前回は公務で休みまして、すみませんでした。どうぞ今年もよろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 続きまして、有坂委員、お願いできますでしょうか。

○有坂委員 RCE北海道道央圏協議会の有坂と申します。

国連大学が認定している持続可能な開発のための教育を推進する拠点の組織を運営しています。よろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 続きまして、先名委員、お願いできますでしょうか。

○先名委員 先名と申します。

札幌市内の幼稚園、小学校、中学校の保護者と先生の会から成ります札幌市PTA協議会の監事を務めております。ほかには、恵庭市にあります『えこりん村学校』、NPO法人共育フォーラムというところで環境教育などの企画運営をしております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 続きまして、西塚委員、お願いいたします。

○西塚委員 北ガスの広報の西塚と申します。エネルギー環境教育を担当しております。よろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 続きまして、山本委員、お願いいたします。

○山本委員 北海道環境財団の山本と申します。

財団に入って23年ですが、ずっと環境教育を担当させてもらっています。

また、小学校3年生と中学校2年生の娘の親ということもありまして、いろいろと勉強させてもらいつつ、ご意見もさせていただきたいと思っております。

よろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） オンラインの松田委員、お願いできますでしょうか。

○松田委員 皆さん、こんにちは。松田と言います。

藤女子大学の人間生活学部でプロジェクトマネジメントを担当している教員で、日本環境教育学会北海道支部の副支部長もさせていただいております。

環境教育について勉強させていただきたいと思っております。

よろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 続きまして、オンラインの坂本委員、よろしくお願いいたします。

○坂本委員 こんにちは。余市からオンラインで失礼します。坂本純科と申します。

私たちは、余市を拠点にエコカレッジという学びの場を運営しています。環境教育を含むサステナビリティという大きなテーマで、経済とか社会とか地域づくり、そういったことも含めた体験的な学習をしています。

最近では、学校との連携というか、学校からのリクエストが増えていて、学校教育とうまく連携していくにはどうしたらいいのか、いろいろと研究しているところでしたので、皆さんから学ばせていただきたいと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） 皆様、どうもありがとうございました。

ここからは、大沼会長にバトンタッチさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○大沼会長 ありがとうございます。

2. 議 事

○大沼会長 それでは、早速ですが、議事に入らせていただきます。

お手元の議事次第をご覧ください。

本日の議事は、（1）令和5年度環境教育関係事業の実施状況及び今後の予定についてです。

委員の皆様には、事務局からの説明の後でいろいろご意見をいただければと思います。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） まず、資料のご確認をよろしくお願いいたします。

本日お配りした資料ですが、インデックスがついているものも含めて、次第、委員名簿、資料2として環境教育関係事業についてです。そのほか、参考資料1の「環境副教材 ワーキンググループの先生よりいただいたご意見から」、参考資料2の「令和5年度環境教育へのクリック募金事業報告書」、参考資料3の「エコライフレポート」、参考資料4が「校外学習用バス貸出し利用校のご紹介」、参考資料5の「令和5年度環境教育・子どもワークショップの概要について」、参考資料6の「さっぽろこども環境コンテスト2023の実施報告書」です。参考資料7は、冊子になっている現物を配付させていただいておりますが、「令和5年度の環境教育・環境学習ガイド」です。

また、これとは別に、皆様の机の上に「札幌市環境副教材及び教師用手引書」を置かせていただいております。本日、皆様からご意見をいただくためにご用意したのですが、既に前回も同じものを配付してございますので、副教材は、お持ち帰りいただかず、置いてお帰りいただければと存じます。

もし落丁等ありましたら合図をお願い申し上げます。

それでは、令和5年度環境教育関係事業の実施状況及び今後の予定についてご説明させていただきます。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 環境政策課の谷内でございます。

私から、令和5年度環境教育・環境学習の実施状況について説明させていただきます。

お手元の資料2をご覧ください。あわせて、インデックスがついた参考資料で補足しながら説明させていただきたいと思います。

なお、環境局の実施事業は私から、教育委員会の事業は教育委員会教育課程担当課の吉田係長から、環境プラザの事業については環境プラザの宮西主任から、それぞれ説明させていただきたいと思います。

まず最初に、資料2の「はじめに」についてでございます。

こちらは、2019年に改定した札幌市環境教育・環境学習基本方針の取組の四つの柱を示しております。

一番下に（1）から（4）までであるとおり、環境教育関係事業はこれら四つの取組に基づいて実施しておりますので、各事業をそれぞれの取組に分類し、取組ごとに区切って、順に説明させていただきたいと思います。

まず、この四つのうち、（1）学校などの教育機関などで行われる関係教育の推進と（2）「環境人材」の育成を一括で説明させていただきたいと思います。

では、次の2ページをご覧ください。

お手元に冊子をご用意させていただいておりますけれども、毎年度、市立小学校の新1年生、3年生、5年生の全児童に環境副教材を配付しており、それぞれ2か年にわたって使っております。あわせて、教師用の手引書も作成しております。より利用しやすい副教材や手引書とするため、理科、社会科、家庭科、生活科、道徳の各担当の教員によるワーキンググループを組織して、毎年度、改訂を行っております。

前回の推進委員会で、環境副教材を学校現場でもっと活用したほうがいいのかという視点から、様々なご意見をいただいたことを踏まえまして、昨年10月に改訂に向けて会議を行ったのですが、そこで、ワーキンググループの先生方と、学校における副教材の活用度向上や今後の副教材の在り方について意見交換を実施しました。

ここで、参考資料1番をご覧ください。

ワーキンググループで、実際に学校現場にいらっしゃる先生方から意見をいただきまして、その意見を表にして集約したものです。それを踏まえて、私どもで今年度の改訂のときに対応できる内容について、表の右側にまとめて記載しております。

いただいたご意見について説明いたしますと、まず、「環境副教材の配付時期が学校の繁忙期である4月のためにゆっくり目を通す時間がない」、「副教材を何か活用しようと考えたタイミングで、大量の副教材が学校に届いている中、環境副教材の存在をついっかかり見逃してしまうことがある」、「先生方への周知に工夫が必要で、年度初めにも先生方に副教材について周知されて、先生方が持っているクロームブックのブックマークに

入れてもらうことができれば、あとの使う、使わないは先生方の判断なのですけれども、それによって活用してくる先生が増えてくるのではないか」というご意見がありました。

それを踏まえて、今回の改訂、つまり今年4月に配る分については、先生方の興味をできるだけ引いてもらえるように、通知文の内容や学校への周知の方法について工夫を行おうと考えております。

また、4月にお配りすると、どうしても通知文に目を通す時間がないということですので、4月に送付する以外に、年度の途中でも学校に環境副教材の活用依頼文を送付して認知度の向上を図ってまいりたいと考えております。

次に、意見の二つ目です。

「『環境副教材』という名前から、この副教材が教科書の科目と関係ないと思われてしまって、使用の優先順位を下げられている可能性があるのではないか」というご意見と、「教科書と関連する学習内容を一覧化した資料が手元にあると環境副教材に手が伸びやすくなるのではないか」というご意見がありました。

今、お手元に教師用手引書があると思うのですけれども、そのうちの1・2年生用をご覧いただければと思います。

見開きの2ページ目、ページ数としては1ページ目の右下に活用対照表があります。これは、教科書と環境副教材との内容で関連する教科・ページを示しており、1・2年生の表には載っているのですけれども、3・4年生と5・6年生の分には載っていないことから、ご意見を踏まえて3・4年生と5・6年生の分でも充実させようというのが1点目です。

さらに、手引きの中にも書いただけでは、どうしても手引きを開かず目を通さない先生もいると思うので、手引書の表紙の下辺りに、関連する教科名と教科書の活用対照表が掲載されている旨を分かりやすく明記しようと思っております。これを見れば、表紙を見ただけで教科書と関連する表が載っているのだなと認知してもらいやすくなるかと考えております。

あとは、環境副教材などを4月に送るときに、活用対照表をその通知文と一緒に、手引書とは別に外出しして添付することによって、手引書を一々開かなくても教科書との関連ページを確認できるという改善に努めてまいりたいと考えております。

次に、三つ目の意見ですが、「子どもたちにネット検索で調べさせている先生も多いのですが、子どもたちが内容を理解しないまま、ネットの記載文をそのまま書き写して理解したつもりになっているケースがある」、あとは、「クロームブックでタップして環境副教材のページに遷移して、そこでごみとか雪などのカテゴリーに分かれて、そこをクリックすると関係するページが展開されるとよいかもしれない」というご意見をいただきました。

そのご意見に対しては、環境副教材の中に、各単元の内容に関連するホームページの二次元コードを掲載しようと考えております。例えば、副教材の実際にページを開いた中に、

ところどころに二次元コードが入っておりまして、それを学校のタブレットで読み取ると、例えば、3・4年生の副教材にカブトムシの幼虫の写真が載っているのですが、その隣に二次元コードを配置するとカブトムシの幼虫が成長する様子の動画を見られるようにするとか、そういう工夫をしているところです。

あとは、今、市のホームページには、環境副教材を單元ごとにデータを分割して掲載しているだけなのですが、ご意見にあるように、ごみとか雪というカテゴリーに分けて掲載するなどして、ホームページの掲載の工夫を行おうと考えております。

また、表の下には、来年度以降の今後に向けたご意見なども記載しております。一つ目には、「札幌市の各部署で様々な副教材を製作しているが、ホームページにはバラバラに載っていて探しづらいので、副教材が一覧になっているページがあるといいのではないか」というご意見、また、「環境副教材を活用した授業展開例などが載っていると、副教材を使ったことがない先生も活用しやすいのではないか」というご意見がありました。また、「クロームブックのアプリ、ムーブノートとうまく連携できるといいのではないか」。あとは、「クロームブックが各生徒の机の上に置かれているということで、クロームブックとか教科書、ノートを机に置いてしまうと、スペース上、別の冊子を置くのがさらに難しくなる」というご意見がありました。それから、これは環境副教材の強みについてですが、「多くの部署、また、現場の先生が関わって毎年改訂されているので、データが常に最新という強みを生かしたほうがいいのではないか」というご意見をいただいたところです。

以上、いただいたご意見を基に、今、私たちが改訂作業を進めております。

資料に戻りまして、この「環境教育へのクリック募金」に進みます。

これは、インターネットを活用した環境教育への支援制度です。札幌市環境プラザのホームページ上で、協力企業、現在は7社おりますが、その環境活動を紹介しており、閲覧数に応じた金額、ワンクリックにつき5円、月額上限2万円を協力企業からご寄附いただいて、それを原資に環境副教材を購入して、希望する小・中学校に寄贈しております。

今年度は、昨年度のクリック実績に応じて、協力企業様から合計168万円のご寄附をいただきました。申込み学校数が計74校と、昨年度の計40校に比べて約2倍の申込みがあり、寄附金額を大きく上回ったことから、やむを得ず、抽せんにより合計45校を選定し、手回し発電機、気体検知管、トマトやキュウリの野菜の苗などを寄贈しております。

クリック募金のホームページ上には、寄贈された環境教育教材が学校によってどのように活用していたかを事業報告書として紹介しております。参考資料2に今年度のものをご用意していますので、併せてご覧ください。

また、クリック募金の周知のために、ここに写真が載っていますが、地下鉄の掲示板へのポスター掲示や、後で説明します、さっぽろこども環境コンテストの会場へのパネル展示も行ったところでございます。

次に、ウの「エコライフレポート」です。

これは、子どもたちが声かけ役になって、家庭におけるエコ活動を促す取組として、平

成19年度にスタートしております。

夏休みや冬休みの前に、市立小・中学校の全児童生徒に対して家庭で取り組むエコ活動を選んで、実践するためのチェック表を配付しております。

今年の夏休みは、札幌市が市内の温室効果ガス排出を2050年に実質ゼロとするゼロカーボンシティを宣言したことを踏まえて、「ゼロカーボン都市をめざそう！」をキャッチフレーズに、節電や節水、地産地消に取り組んでもらう内容としております。取組の終了後は、学校単位で子どもたちの取組結果を二酸化炭素削減効果に換算して、これを記した認定証を配付しております。また認定証の中では、「ほかにもこんな取組をしてくれました」という欄を紹介しております。

夏休みの取組結果は、参考資料3に書いてあります。

今、ちょうど学校は冬休みなのですけれども、先ほどの部長からの挨拶のとおり、この夏、猛暑で地球温暖化対策が急務と思われることから、引き続き「ゼロカーボン都市をめざそう！」をキャッチフレーズに、節水や節電、食品ロス防止に取り組んでもらう内容としております。

参考資料にエコライフレポートの現物をつけておりますので、併せてご覧ください。

前回の推進委員会で、エコライフレポートの記載内容は小さい児童が理解できないのではないかというご意見をいただいたことを踏まえまして、表面のゼロカーボン都市の記事の横に二次元コードが載っていますけれども、札幌市気候変動対策行動計画の小・中学生版が出るようになっております。これによって、子どもが分からないことを親子で一緒にスマホですぐに調べて、家族でエコ活動に取り組もうという契機にさせていただくために、このような改善をさせていただいております。

あとは、マイナーチェンジになるのですけれども、エコライフレポートの裏面の右下のほうをご覧くださいと、ベジタブルオイルインクというマークがあります。

今回のエコライフレポートから、印刷の際に環境に配慮した植物インクを使用して皆さんにお配りしております。

夏休みのエコライフレポートの取組は、小・中学生全体で85.5%と、昨年度の夏休みの81.9%から改善しました。昨年度から紙のレポートを各学校で回収、保管して環境局において集約、集計するという一連の事務作業を軽減するため、今、子どもたちにタブレットが配付されていますので、そのタブレットのウェブアプリケーションの「グローバルフォーム」を使用して、子どもたちがタブレットに取組結果を入力してもらう形式に変更しました。

去年の夏に始めたときは、操作不慣れとかシステム不具合などで、学校から一覧表が送付されなかったり、その結果、取組学校数が減ってしまったり、また、学校からのお問合せもそのときは多く頂戴しましたが、今年度の夏休みは取組学校数が復調しまして、学校からの問合せも減っておりますことから、学校への周知が一定程度進んだのかなと考えております。

次に、エの「校外学習用バス貸出し」に移ります。

こちらは、環境に関する体験学習の場の提供を目的に、市内小・中学校を対象に校外学習バスの貸出し事業を行っているものです。

学校現場のニーズなどを踏まえて、平成28年度からは、市外の近郊や民間施設も見学対象施設に加えて、太陽光発電や風力発電の設備、LNG基地などを見学コースに組み込んでいるほか、各学校が独自に希望する見学先においても対応しております。

お手元の参考資料4で利用実施例を紹介しております。

これは夏の委員会でもお話ししたところでしたが、当初、貸出し期間を7月から12月中旬に設定して募集し、94校の応募のうち、抽選で52校を貸出し対象としたのですが、昨年の春の新型コロナウイルス感染症の5類引き下げに伴う観光需要の増加や、バス台数や運転手の不足からバスの貸出し業務に応札するバス会社がおらず、入札不調となってしまいました。

それで、バス会社に聞き取りをして、11月以外はちょっと厳しいというお話をいただいたものですから、11月以外に校外学習を予定していた各学校には申し訳ございませんということで、個別にバスの調達をお願いしたところです。また、11月に校外学習を予定していた学校につきましては、各学校に希望を聞き取って再入札を行い、何とかバスを調達することができまして、合計7校が利用いたしました。

次に、オの「学校での出前講座の実施」についてです。

札幌市では、市民への情報提供と対話の一環として、市職員が依頼に基づいて地域に出向き、所管事業について分かりやすく説明を行う出前講座を実施しております。

近年はSDGsの普及とか、地球温暖化・気候変動への関心の高まりによって、これらの講座への依頼が増えておりまして、総合学習などの授業の一環として活用されています。

表にあるとおり、多くの学校に利用いただいています。補足としまして、件数が昨年度と比べて増えているにもかかわらず人数が少なくなっている理由として、これまでは体育館に全クラスの児童生徒が集まって同じ話を聞くというパターンが多かったのですが、今年は、生徒がSDGsの17個の目標の中から学びたいテーマを選択して、選択したテーマごとに分かれて出前講座を受講するという形式で授業を行う学校が増えて、その結果、1件当たりの受講者数が減少したことによります。

出前講座は、私たちがじかに子どもたちに環境について伝えることができ、子どもたちの反応もそのまま返ってくる貴重な機会であるので、今後も引き続き続けてまいりたいと思っています。

次のカについては、吉田係長からお願いいたします。

○札幌市教育委員会（吉田企画担当係長） 教育委員会教育課程担当課の吉田です。よろしくお願いいたします。

カの環境に関する全園・全校の取組についてです。

環境首都・札幌の宣言日である6月25日の前後2週間を「さっぽろっ子環境ウィーク」

の期間として設定させていただいております、こちらの期間に、全ての市立園・学校が環境に関わる取組、エコアクションを重点的に見詰め直し、年間を通して札幌市の子どもたちに環境を守り育てようとする態度を育てているところです。

今年度につきましては、昨年度に札幌市立高校の生徒たちが環境問題について探究し、作成した動画などもきっかけとしながら、札幌市立の小・中学校で、「さっぽろっ子環境ウィークエコアクション」として、環境に関する問題を考えて、学習や取組を実践しているところです。

以上です。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ありがとうございます。

次に、（２）「環境人材」の育成について説明させていただきます。

まずは、環境プラザ関係事業について、環境プラザから説明します。

○札幌市環境プラザ（宮西主任） 札幌市環境プラザの宮西涼美です。

アの「環境保全アドバイザー・環境教育リーダー派遣」についてご報告いたします。

市民団体、町内会、学校などに対して、環境に関するアドバイザーやリーダーを派遣する制度となっております。

札幌市環境保全アドバイザー派遣制度では、地球環境、自然保護、リサイクル、ごみ問題など、様々な環境分野の研修会や学習会等に専門家を派遣する事業となっており、令和5年11月30日現在、9人のアドバイザーに登録をいただいております。

札幌市環境教育リーダー派遣制度は、主に植物や野鳥、昆虫、水生生物などの自然観察会や地球温暖化、ごみ、エコライフ分野の指導者や解説者を派遣する事業となっており、同じく令和5年11月30日現在では23人のリーダーにご登録をいただいております。

例年、利用の多い川での自然観察、自然体験活動は、今年度も派遣数がとても多く、全体の半数近い依頼が川をフィールドにした活動となっております。また、今年度の特徴としまして、小学校や幼稚園の教員に向けた研修会での依頼や、地域団体からの講演の依頼が多く見られました。

今後も、新しいニーズに対応できるよう、利用者の声の聞き取り等を反映し、市民の環境活動の希望に寄り添った支援を継続してまいりたいと考えております。

続きまして、イの「こどもエコクラブ」についてもご報告いたします。

環境プラザは、公益財団法人日本環境協会が実施するこどもエコクラブの札幌市内における事務局の担当を行っております。こどもエコクラブへの登録団体や、これから環境に関する活動を始めようとする団体への情報提供を行っております。また、年に一度開催しているこどもエコクラブ交流会を12月16日土曜日に開催し、市内で活動する2団体のエコクラブとともに、農業学習施設KUBOTA AGRIFRONTの見学とクラブ間の交流を行いました。

また、札幌市環境プラザが主催するさっぽろあそエコ団は、ビーチコーミングと、海洋ごみの調査や、秋の円山での自然観察会などを行い、さっぽろの四季を楽しむ活動を継続

しております。

ウの「指導者向け研修」についてです。

札幌市内の児童会館と共催しまして、公益財団法人キープ協会と連携した体験活動に関する研修会を実施し、児童会館職員に向けて、アクティビティーづくりのノウハウや、体験を参加者の経験として落とし込むための手法について、ワークショップや座学を通して知識提供を行いました。

今年3月には、一般に向けて自然体験活動のプログラムづくりについての講座を計画しており、次年度からの活動を後押しするための内容を検討しております。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 次に、エの「環境教育・子どもワークショップ」について、私から説明いたします。

これからの未来を担う子どもたちが、地球環境を意識して生活する心を育み、自発的な行動につなげるきっかけとなることを目指して、令和2年度から、環境教育・子どもワークショップを開催しています。今年度は、今月1月20日土曜日と27日土曜日に、各日5か所ずつ、計10か所の児童会館に通う小学生を対象として開催予定です。

ワークショップは、本部のメインファシリテーターから児童会館の各会場にオンラインでプログラムを配信して、各会場では、現地のファシリテーターの誘導によって、子どもたちが対面によりコミュニケーションを取るとともに、オンラインで各会場とも意見交換するなど、オンラインと対面をミックスして行います。

環境教育に興味があって、ワークショップなどのスキルを身につけたい高校生、大学生など、ユースの世代の人材育成も同時に取り組むこととして、希望する若者を対象にファシリテーター等の養成研修会を実施して、子どもワークショップの運営スタッフの一員として活動してもらいます。

お手元に参考資料5があるのですが、こちらに今年度の実施概要が載っております。参加する児童会館は、参考資料5の真ん中より下に10か所、載っているとおりです。

次のページを開いていただくとチラシが載っているのですが、これはユースのファシリテーターとグラフィッカーを募集するチラシになっております。昨年12月に1回目を開催し、明日11日と、その次の週の18日にもう一回ずつ研修を行って、実際にユースの人たちに本番に臨んでもらうことになっております。

次のオの教員に向けた研修につきまして、吉田係長からお願いいたします。

○札幌市教育委員会（吉田企画担当係長） オの「教員に向けた研修」についてご報告させていただきます。

教育委員会では、札幌市の学校教育に携わる教職員の資質向上と専門的な力量を高めることを目的に、環境教育へ役立つ施設の活用ですとかSDGsの基礎というようなテーマで、環境教育に関する専門的研修を実施し、今年度は、前回の会議でお伝えしていた予定数よりも少し多い、延べ150人以上の先生が受講しました。

以上です。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ありがとうございます。

（１）（２）についての説明は以上ですので、議事進行をよろしく願いいたします。

○大沼会長 ご説明をありがとうございます。

（１）は学校など教育機関での取組ということで、（２）は「環境人材」の育成というお話でした。

どちらからでもいいのですが、前回、特に副教材についていろいろご意見をいただいたところであり、いろいろ改善もしていただいたということで、（１）の学校での取組のところから順番にいきたいと思います。

副教材は、新年度に向けて、先ほどのものを鋭意作成中という理解でいいですか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） そのとおりです。

○大沼会長 ということで、皆様からご質問、ご意見などをお願いします。

○伊藤委員 毎回、資料は大変すばらしいというお話をしていますが、ワーキンググループのご意見を見ると、やっぱり十分周知されていないのではないかというお話も載っていましたね。

これは一つのアイデアですが、今、コロナの関係が緩和され、先生方の集まりが前ほど厳しくないのであれば、例えば、校長会とか教頭会の際にPRをしていただくという手はあるのではないかと思います。たしか校長先生や教頭先生の集まりの中で研修がありますね。そういうときに、環境局の方が行って、1時間しゃべらなくてもいいのですけれども、例えば10分でも15分でも、「こういう内容について取り組んでみてはどうか、こういうふうに改善しています」ということをまずは管理職の方にPRして、それから、学校で「内容が変わったみたいだぞ」というお話をしていただいいてはどうでしょうか。また、大変なのは私も重々承知しており、野崎委員には申し訳ないと思っていますのですけれども、本当にたくさんの資料が来て、4月は大変だと思いますから、来年度の計画は2月とか1月にはもう作ってしまうと思うので、前倒しでされてはどうでしょうか。できれば、ノートパソコンを使ってやれるようなものをどんどん充実していければ、ある意味、SDGsで言えば使わなかったら無駄になるので、資料は紙媒体ではなくてもいいのかなという気がしております。

紙媒体は教師用のものは必要だと思いますけれども、子ども用は、紙媒体ではなくても、そのほうが更新もしやすいかもしれませんし、配布の手間がないなどメリットも多いのではないかなと思いましたので、お話しさせていただきました。

○大沼会長 直接的にPRする機会が設けられないかというお話で、野崎委員、いかがですか。

○野崎委員 毎回、このやり取りをしてすみません。

本当にそのとおりだと思います。

まずは、校長先生、教頭先生に周知というのは必要なことかと思っています。

もう一つは、うちの学校の子どもたちの環境に対する学習の方法を全部見ているわけで

はないですが、教室を回って見ているときにはやっぱり、タブレットの中で検索をかけて、その中に引っかかったものを見えています。それが自分たちとフィットしていようがしてまいが、それをまず見てというところが見受けられます。

先ほど、こちらの本を携帯で見たら、全てPDF化して札幌市のホームページに出ています。今、置き勉と言いまして、重たい教科書やふだん毎日持ち帰る教科書は学校に置いておくということを結構な学校がやっているのですが、これだけでも結構な重さになる現状があると考え、PRとしては、「札幌市環境副教材」と入力すると、こちらの本がタブレットの中で見られて活用できるよう、この辺りをより周知すれば、皆さんが新たに労力をかけることなくいろいろな現場で使ってもらえるかなと、伊藤委員のお話を聞いて思いました。

○大沼会長 ありがとうございます。

ホームページにPDFで既に載っているということと、副教材を全部リスト化して検索しやすいようにということが先ほどの説明にあったと思いますけれども、教育担当から補足はございますか。

○札幌市教育委員会（吉田企画担当係長） ご意見をありがとうございます。

今、ご意見をいただいたことはごもっともだと感じております。

学校現場には、副教材というものが本当に多種あります。なので、今、管理職の先生方にもご協力をいただきながらですが、現場の先生方のアンテナに引っかかるように、私たちも周知の仕方を工夫していくことが必要だなと感じております。

また、今は、様々な副教材をデジタル化してタブレットで子どもたちが見られるようにしていくという移行期かなと感じております。他部局の様々な副教材等についても、今、デジタル化の動きが進んでおりますので、そうしたことも併せて、教育委員会としても、子どもたちがより検索して調べやすくというところを検討していきたいと考えております。

○大沼会長 副教材等のお話ですが、どんどん使いやすく、検索しやすくという取組を順次進めていただいているということだと思います。ありがとうございます。

○山本委員 副教材とエコライフレポートの二つについて、関連の話ですけれども、副教材は大変素晴らしいと思って拝見しています。いろいろ工夫されていて、本当にいいものになっていると思っています。

一方で、エコライフレポートで1年生から3年生用に気候変動という単語が出てくるのは、私には違和感があります。

副教材は各学年で適した題材やテーマ、切り口ということで三つに分かれていると思うのですが、気候変動が出てくるのは、やっぱり5・6年生なのです。そういった話題を出していくのはいいと思うのですが、気候変動まで低学年につなげる必要があるのかなと思っています。例えば、ごみを出さないようにしようとか、無駄にしないようにしようというのは、副教材の中でも出てきていますし、そういったことを1・2年生で扱うのであれば、エコライフレポートもそういった範囲のものが適するのではないかと思

っています。

この冬休みも、3年生の娘が持って帰ってきたのですが、逐一聞かれるのですけれども、説明する単語を全て習っていないで分からなくて、気候とは何かから始まります。

そこまでいくのは、小学校でいえば6年生とか5年生、中学校であればQRコードをつけていただいているものを活用しながら取り組めるかと思いますが、一律のテーマで低学年までやるというのはちょっと難しいのではないかという感想を持っております。

○大沼会長 エコライフレポートの中身について、各学年に応じてということだと思いました。事務局の谷内係長からご説明いただけますか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 前回も同じようなご指摘をいただきまして、私たちもどうしようかと考えていました。先ほどお話をしたとおり、昨年度、札幌市でもものすごい猛暑が続いたこともありまして、ゼロカーボンの対策については待ったなしの部分があるのではないかと感じておりまして、ゼロカーボン都市という難しい言葉ではあるのですけれども、皆さん、地球温暖化を防ぐためにエコ活に取り組もうということで、こちらのスローガンにさせていただいた次第です。

ただ、難しい言葉が並ぶということがあるものですから、今回は二次元コードで小・中学生向けに書いてある言葉と一緒に、親子で一緒に学びながら、親子で取り組んでもらえるようにということで改善したのですけれども、それでも内容として難しいということであれば、今後、書き方とかPRの仕方も今後改善していかなければいけないと思っております。

○大沼会長 ご説明をありがとうございました。

難しい言葉の意味を知ることと何か行動を実践することとの距離感と、自分が行動していることとなぜこれがいいことなのかという理解の結びつきがもう一個欲しいというのが山本委員のご指摘だと理解しました。

実際に参考資料3の3番のよく取り組んだ項目と取組率を見るとちゃんと、例えば小学校低学年の順位2位、窓を開けて風を取り込む、高学年と中学校は3位で、窓を開けて、これは結構暑かったことをちゃんと反映していて、それから小学校低学年では4位で、高学年と中学校で5位になっている、図書館やプールなど涼しいところに出かけるとか、これも暑い夏に皆さんはそれなりに頑張った痕跡がちゃんとあるわけです。

そういう行動に結びついているということと、自分たちの行動がこれにつながっているのだという行動の部分と理解の部分をもう一步、説明が頭で分かることと行動と結びつくというのはもう一步必要というところがあるのだろうと思ったところです。

ありがとうございました。

○山本委員 実績の話で、まさに子どもがやったのですけれども、全部聞かれました。なぜ北海道で採れたものを食べることでいいことにつながるのか、何で他に涼しくしているところに行ったほうがいいのか、家が涼しかったら同じじゃないかと聞かれたときに親は何と答えればいいのかだろうということ、低学年でも親は説明し切れないなという感想が

あったので、あえて言わせていただきました。

○大沼会長 ありがとうございます。

エコライフレポートのことについてご意見をいただきましたが、いかがでしょうか。

○久保田委員 ちょっと別の観点から今、エコライフレポートの話が出たのですけれども、この事業は平成19年にスタートしたと書かれていますけれども、今年で24年ですから足かけ5年目ぐらいになるのでしょうか。

実績を見ますと、昨年から改善されたという報告が事務局からありましたけれども、ざっくりとした話で、札幌市内に小学校が200校程度あって、中学校が100校程度あると考えると、小学校で90%の実施率だとしたら、10%の学校、約20校程度はやっていないと見えるわけです。中学校も同じように97校で77.6%ですから20校程度が実施していないのかなと見えます。

せっかくこういういい取組をしているので、札幌市内の多くの学校はやっているけれども、一部の学校は取組が手薄になっているところがあります。札幌は環境首都・札幌ということで非常に力を入れているわけで、これだけではないですが、いろいろ取り組んでいるので、ぜひやっていただけるように働きかけると。学校がそういうことでなければ子どもたちは当然関心を抱かないでしょうから、学校のイニシアチブも重要だと思います。

学校に明言することは当然できないかもしれませんが、言い方は難しいですけれども、ぜひいい取組なので参加していただきたいという働きかけですね。ここ数年、大体同じような数字で推移しているので、学校によって出入りはあると思うのですけれども、改善の余地があると思いました。

○大沼会長 ありがとうございます。

取組率が高いなりに、まだ取り組んでない学校があるというところへのアプローチをどうするかというご質問、ご意見だったと思います。

野崎委員、お願いします。

○野崎委員 私は、毎回、エコライフレポートでしゃべっている気がしますが、本当に100%にできるといいだろうなと思って聞いていました。本当にそのとおりにかなと思っていました。

現状としては、うちの学校の様子を見ると、欠席児童とか、これやるときに、今、グループフォームというものがあって、QRコードみたいなのを読んだり、みんなで「せーの」でやるのです。そうすると、今年の場合は、コロナとかインフルエンザとか流行っている中で、全員がそろっていない中で1時間をどこかで取ってやるのですが、欠席した子たちを再度集めてもう1回やるかということ、結構漏れることが多いので、欠席児童がいたら、もう1回やっているかやっていないかということも大きいと思います。どの学校も一定数はちゃんと取り組んでいると思います。

あと、実際に僕が目にしたのは、うっかりその先生は忙しくて忘れちゃっていたということもあるのかなと思います。ただ、これはいいものなので、ぜひ取り組んでいくという

啓発活動は必要かと思っています。

また、先ほど山本委員からありましたが、ゼロカーボン都市のこの言葉は難しいですね。ゼロカーボンはもちろん大切ですが、僕たちが何年前につくった環境教育・環境学習基本方針の一番最初の基本理念ですね。「みらいを想い、みんなを思い、真剣に考え行動できる環境市民を育てます」と、ここさえぶれなければ、平易な言葉だったり、例えがここに出ているホッキョクグマとかペンギンじゃなくてもいいのではないかと思います。より子どもたちがすんと深い納得だったり理解ができるのは、例えば今年の夏は暑かったよねとか、より近くしてみるとか、それが結局ペンギンとかホッキョクグマのいる南極につながるのかもしれませんが、そのところは、山本委員が言ったとおり、再考の余地があると思います。より近くなると、より子どもたちも実感を持って取り組めるのかなと思いました。勉強になりました。

○大沼会長 ありがとうございます。

どうしても、お休みをしてしまう児童、また、どうしても学校の先生も100%カバーできないところで頑張っているということかと思っています。

ほかの部分について、あるいは学校関連ということで、三浦委員、何か補足はございますか。

○三浦委員 今、話が出たところで感じたことも含めて申し上げます。

確かに、エコライフレポートも、中学校のほうも、小学校と比べて少し差があるかなと感じておりました。ですので、先ほど、いろいろなアイデアがありましたように周知の方法に関しては、校長会等も毎月例会がありますので、市教委の方が来て説明ということも可能ですので、そういうところで周知していただくことも可能なのかなと思っていました。

また、昨年度の資料1を見ましたら、使いやすさのところで、活用対応表を見ていたら、小学校低学年の1・2年生のものはすごくわかりやすいと思って見ていました。この後、3・4年、5・6年も大変だと思いますが、活用対応表は有効であると思います。

あとは、先ほどから出ていたデジタルのところですね。教科書が変わってきてQRコードもつくようになってきています。少しQRコードを読むとか、紙媒体は紙媒体のよさはすごくあると思うので、そこのバランスが必要だと思うのですが、デジタルの効率的な活用というところの使いやすさも考えていくことも必要と思いました。

また、中学校にとっては、エコライフレポートに関して意味づけが大事だと思います。中学校では、環境についてと理科とか社会が中心になって学んでいますが、環境を学ぶことは子どもたちにとってすごく大事です。札幌市でも推進していますので、そのところを強く働きかけていこうと思っていました。

その中で、エコライフレポートの行動の裏のところ、エコアクションがつながるといいなと思ってはいますが、6番のところはなかなか難しいと思っています。宅配便をできるだけ1回で受け取るって、子どもにとってよりは親なのかなという感じでいました。そんなところもあって、これからはいろいろな工夫がされていると思うので、バージョンア

ップが可能なところはどんどんしていったらいいのかなと考えております。

○大沼会長 ありがとうございます。

校長先生から校長会でもおっしゃっていただいたのは非常に心強い発言かと受け止めております。

エコライフレポートの改善ということかと思いますが、宅配便は難しいということで、事務局の側で次回以降の改善ということで何か補足等がありますか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 貴重なご意見をありがとうございます。

おっしゃるとおり、小学校低学年の子が実際に宅配便を受け取るというケースはほとんどないと思いつくっていたのですが、エコライフレポートは、子どもだけではなくて、家庭にも取組を広げるという意味でつくっている面もあるので、子どもから親に伝えてもらって、親のほうで協力してもらうようにという意味も込めてこの項目をつけたのですが、子どもが直接取り組みやすいものということであれば、そこは改善を図っていきたいと思っております。

○大沼会長 子どもだけではなくて、ご家庭ということで、山本委員のように家族で必死に議論するご家庭もあれば、もしかしたらそうじゃないご家庭もあるかもしれない中で、子どもだけではなくて家庭でという思いもあるということです。ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

（２）の環境人材のほうでご意見等はございますでしょうか。

○伊藤委員 前回もお話したのですが、環境教育・子どもワークショップです。

たしか児童会館とかミニ児童会館は、時期によって校外清掃という活動をされているところもありますね。校外というか、その館の外を清掃するとか、学校に入っているところは学校の周りを清掃するという環境活動をしていたかと思います。その実践とタイアップしていくとか、冬はどうしても座学になってしまうところがあるので、実際にやってみた結果とか実際にこれからやろうとか、そういうものとうまく連携してやっていると、もっと効果があるのではないかという気がしています。

これをすぐやれという問題ではなくて、そういうものも検討してもらって、今、各区で1館ぐらいですね。これをもっと広められると、より効果があるのではないかという気がしました。

○大沼会長 児童会館でワークショップは意見交換をしたりということですが、それぞれの児童会館でいろいろな取組をされているので、その取組や活動との結びつきがあったらよいのではないかというご意見かと受けとめました。

○事務局（谷内環境教育担当係長） ワークショップについて、前回も同じようなご意見を伊藤委員からいただきました。野外学習とのタイアップになりますと、児童会館との調整が必要になってきますので、来年以降のワークショップのやり方については、いただいたご意見を踏まえてこれから検討していきます。

○大沼会長 検討いただくということで、引き続きよろしく願いいたします。

もう1点ぐらい、特に環境人材というところでご意見等がありましたらご発言をお願いしたいと思います。

オンラインの坂本委員、お願いします。

○坂本委員 さっぽろこども環境コンテストは、私も何年か継続して審査員をやらせていただいています。子どもたちの非常に伸び伸びとした活動とか発表にいつも感激するのですが、だんだん参加数が減っていると伺いました。もちろん、コロナ禍だったということもあるのですが、学校の先生方の働き方の問題で、週末に引率をするとか、そもそも課外活動で指導される先生方の負担は大きいのだろうと想像しています。

今年も事前収録をして審査に臨まれた学校がありました。もちろん事前収録でもいいと思うのですが、現場にやってきて、大勢の人の前で緊張して発表して、喝采を浴びる興奮とか、失敗して悔しい思いをするとか、いろいろな人に褒められたり、ほかのもっと上級生の優れた活動を見て刺激を受けたりというのは、すごく大きいと思うのです。

ですから、収録を並べるとか書類の審査ということも可能だと思うのですが、何とか発表会に参加できるような進め方がないのか、先生方に負担をかけないような形がないのかと思っていました。

先生に伺いたいのは、地域の人、父母の方に協力してもらおうということは難しいですか。

○大沼会長 環境コンテストは、(3)でこれから説明していただくことになるので、一旦(3)と(4)を説明していただいて、今の坂本委員のご質問に帰って、学校の先生にお答えいただくという順番でよろしいでしょうか。

○坂本委員 すみません。どのタイミングでもいいです。

○大沼会長 では、話が途中になってしまったのですが、(3)が文字どおり環境教育や環境学習の場とか機会をどう充実させていくかという議論だと思いますので、残りの(3)と(4)のご説明をお願いいたします。

○事務局(谷内環境教育担当係長) それでは、(3)から進めていきたいと思うのですが、アとイにつきましては、環境プラザの事業でございますので、環境プラザから説明させていただきます。

○札幌市環境プラザ(宮西主任) アの「学習支援等」についてご報告いたします。

環境プラザ見学者への展示解説や展示物を利用した見学者向け環境教育プログラムの実施を行っております。また、教材の貸出しなど、利用者の要望に合わせた学習支援等を行っております。

また、見学アクティビティーの充実を図るため、北大発スタートアップ企業である合同会社エゾリンクさんとともに、脱炭素をテーマとした見学アクティビティーを開発中です。

環境対策の重点となる脱炭素を分かりやすく市内外の子どもたちに伝えられる内容を検討しております。

続きまして、イの「各種講座等の実施」についてご報告いたします。

委員の松田先生と共催しまして、ファッションをテーマにエシカルな消費について考えるワークショップの開催や、エネルギーについて風車工作を交えた見学ツアーをNPO法人北海道グリーンファンドと共催で実施をするなど、様々な団体、企業の皆様と連携して、各種講座を実施しております。

1月以降も、環境カウンセラー協会との連携事業等を計画しております。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 次の「こども環境コンテスト」についてです。

これは、小・中学生が日頃、環境のために取り組んでいる活動を発表するコンテストとして、平成20年度から実施しています。活動の発表を通じて、周囲の子どもたちのほか、大人たちにも活動の輪を広げていくことを目的としています。

今まで、コロナがあったため、オンラインとか事前収録とかいろんな方法で開催してきたのですが、今年度は4年ぶりに会場でのステージ発表を実施いたしました。なお、大沼会長、坂本委員におかれましては、審査委員としてご参加いただきまして、また、伊藤委員におかれましては、会場でご観覧いただきまして、誠にありがとうございました。改めて御礼申し上げます。

先ほど、坂本委員からお話いただいたとおり、今回、当日、児童や生徒の引率が難しい学校が一定数あるということに配慮しまして、今回、発表の様子を事前収録して、当日会場で公開するという試みを行いました。

参考資料6をご覧ください。

両面になっているのですが、目的と概要と日時と場所が書いてあって、写真も載せております。

裏面に行ってくださいと、参加チームが載っております。今回、学校外団体の部2団体、小学校の部4団体、中学校の部2団体、あとは特別発表を札幌大通高等学校にさせていただいて、合計9団体に発表してもらいました。

小学校については、ここ数年、参加が1校とか2校というのが続いておりまして、今回は久しぶりに4校が参加してくれて大変ありがたいと思っていたところですが、先ほどご指摘いただいたとおり、事前収録の学校が4校中3校あったことから、来年のコンテストに向けてどういう形で運営していけばいいのかというのが課題になっております。

次に、（4）普及啓発のための情報の発信・広報と行動の後押しについてです。

アとイについては、環境プラザからお願いいたします。

○札幌市環境プラザ（宮西主任） アの「環境プラザホームページ等」についてご報告いたします。

環境プラザでは、講師派遣や貸出し教材、事業などについてホームページで情報提供を行っているほか、フェイスブック、インスタグラムでの投稿や、「エコチャン！！環境プラザYouTubeチャンネル」での動画配信で情報発信を行っております。

続いて、イの「環境中間支援会議・北海道」の取組についてご報告いたします。

環境中間支援会議・北海道は、行政や地域など様々な組織との間に立って、情報提供や

アドバイス、コーディネート等のサポートを行う会議です。環境省北海道環境パートナーシップオフィス、通称EPO北海道、それから、公益財団法人北海道環境財団、札幌市環境プラザが連携して、北海道内における様々な環境活動の支援を行っております。

また、環境省北海道地方環境事務所、北海道、札幌市も、オブザーバーとして、定期的
に開催される会議に参加しております。

なお、ホームページ「環境☆ナビ北海道」におきまして、環境に関するイベント情報や
助成金などの公募情報、キャンペーン情報などの配信をしておりますので、ぜひご確認ください。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 次、ウの「環境広場」について、私から説明いたし
ます。

環境広場さっぽろは、子どもたちを主たる対象に、環境教育を目的としたみらいを想う
総合環境イベントです。平成30年度と令和元年度は札幌ドームを会場に開催し、令和2
年度、令和3年度は、コロナの拡大に伴って、札幌ドームでの開催を見送って、札幌ド
ームをモデルとした仮想空間を会場とするオンラインイベントとして開催しました。令和4
年度は、3年ぶりに札幌ドームで開催したところです。

今年度は、G7札幌 気候・エネルギー・環境大臣会合実行委員会主催事業として、たく
さんの北海道民、札幌市民の方々に楽しみながら環境・SDGsに関心を持っていただく
とともに、環境ビジネスの振興等を目的とした展示・体験イベント「環境広場ほっかいど
う2023」として、大臣会合の開催に合わせて札幌ドームで開催しました。

来年度の開催については、まだ調整中です。

最後に、エの「環境教育・環境学習ガイド」の発行ということで、お手元に今年度の新
しく出来上がりましたものを置かせていただきました。

これは、札幌市環境教育・環境学習基本方針に基づいて、環境問題の理解促進や環境保
全向上の推進に向けて札幌市の各部局が行っている取組をまとめた環境教育・環境学習ガ
イドとして、毎年度発行しているものです。

市民への広報、情報提供に活用して、各取組への市民参加を促進し、環境教育・環境学
習の一層の推進を図っております。

あわせて、札幌市各部局の環境教育・環境学習に対する意識を高めて、基本方針の趣旨
に沿った事業展開を促す役割も果たしております。

ガイドでは、これまで説明させていただいた事業を紹介しているほか、各部局による札
幌市の環境教育・環境学習に関する取組一覧を掲載しており、札幌市ではどんな事業をし
ているのだろうか、こんな事業を探しているが、札幌市ではやっているのだろうか、など
を探すのにも便利なものとなっております。

説明は以上でございます。よろしく願いいたします。

○大沼会長 ご説明をありがとうございました。

それでは、話が戻って恐縮ですが、先ほどの坂本委員のご指摘に対して、まずは学校の

先生から何とかならないだろうかという、いつも要望を突きつけられる側で恐縮ですが、お願いいたします。

○三浦委員 いろいろなお意見いただき、ありがとうございました。

子どもにとって、いろんな活動することはすごく意味があって、それから、自分らが活動したことの取組をまとめるということもすごく意味があって、さらに、発表をするということはものすごく貴重な体験になると思っています。これが環境コンテストなのかなと思っていますし、学校としても是非やっていきたいという気持ちがあります。

その中で、事前収録ではなくて、生で聞くというのは私も本当に大切だと思います。

理科の関係で言うと、札幌市の関係で、札幌市の中学校の主に科学部が中心になるのですけれども、「私たちの科学研究発表会」というものを毎年実施しておりまして、コロナの前は中学生が一堂に集まってやっていたのですが、コロナになってからオンラインになりまして、そして、久しぶりに今年度また会同となりました。改めて見ると、ライブ感というか、目の前にいる人の前で発表するということは、子どもですので緊張するのですが、やり終えた後の充実感というか、成就感というか、そういうことはこれからの子どもにとってはものすごく価値があると思っています。

ただ一方、管理職の立場で申し上げますと、働き方改革ということがありまして、土曜、日曜、休日に引率ということを考えて場合に、管理職として、休日に引率をお願いしたいことはなかなか言えなくて、基本的にはその振替があるわけでもないので課題はあります。

ただ、将来的には、今、コミュニティ・スクールも札幌市でどんどん進んできていますので、学校の教員ではなくて、地域の方、保護者も含めて、一緒に活動できるように進んでいくと思っています。

ただ、まだ数年かかるとは思いますが、今は、さっぼろこども環境コンテストはすばらしいので、これを少し裾野を広げていくという活動が必要であると思っていますので、もし来年以降も事前収録も可だということと、今年度よりも来年度、1校でも2校でも1団体でも増えていって、裾野をちょっと広げていって、コミュニティ・スクールに移行できていくと、さらに発展していくのではないかと思います。

○大沼会長 ほかにいかがでしょうか。

○坂本委員 先生方の立場や環境を考えると難しいのだろうというのは重々承知しているのですけれども、学校は学校の先生たちだけで運営していくのはいろんな意味で限界もあるでしょうから、それを地域で支えられるとか、行政がどういう形で補助をするかというところで子どもたちのチャンスをできるだけ支えてあげられたらいいのではないかと思います。

○大沼会長 ありがとうございました。

山本委員、お願いします。

○山本委員 釧路でも同じようなことをやっていると前回申し上げたのですけれども、釧路だと、私は担任の先生単位でもつながっていますので、子どもたちが参加されるので、

来ていただくことは可能ですか、もちろん行きます、という先生たちが四、五人いらっしゃいます。教育委員会の方とか管理職とお話しすると、本来、総合でやっているのであれば、授業の中で校外で発表するというのを入れ込んでこそそのカリキュラムであるというお話もあります。

例えば、学校外団体の方たちは逆に参加が難しくなりますし、広く一般の方が聞くというところでは人数が少なくなるかもしれませんが、プラザさんでやられている、その会場でやられているところが、平日、学校で時数を取っていただいて、これは全道ではなくて札幌市内なので、公共交通でプラザに来ることができる可能性もあるのかなと思います。そういった可能性というのは難しいでしょうか。時数の確保という観点かと思います。

○大沼会長 恐らく、平日開催となると、事務局の側でお答えいただかないといけなくなると思うのですが。谷内係長、いかがでしょう。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 平日に開催できるかどうかというのは、学校現場とかその辺の学校外団体の方々が、ふだん土・日に集まっているところが平日集まれるのかどうか、その辺のご意見を踏まえての検討が必要だと思っております。

○大沼会長 本質的には、学校の先生ばかりにお願いするというよりは、先ほど来、三浦委員も坂本委員もおっしゃっているとおり、地域コミュニティー全体で子どもたちを支える活動を展開していく形をつくっていくということで、学校の先生も地域コミュニティーも行政も、その他支える様々な団体も連携して子どもたちを支えるという形をうまくつくっていくのが一番本質的だと感じました。

ライブはすごくよくて、最優秀賞を発表するときに、子どもたちがドキドキしていて、祈るようにしていて、発表した瞬間にキャーっと騒いで抱き合って、ああいう経験を積み重ねるのは本当に大事だと思います。それは録画では得られない、子どもたちにとっては貴重でかけがえのない経験になると思うので、学校の先生にお願いするばかりではなくて、いろんな形でできるようになったらいいなと思います。

○伊藤委員 私も、先日、「さっぽろこども環境コンテスト」を生で見させていただきまして、大変感動しました。

特に、高校生の発表がすばらしくて、坂本委員もおっしゃっていたように、いいものを次の世代に伝えていくというか、発表の場としては生というのが確かにいいなと私も思います。

そういうことで、土・日の問題はありますけれども、教員であれば振替というのを考えてもいいのではないかと思います。教育委員会ですが、公務員だって振替はできるわけですよ。私は前回アイデアを考えてきますという話をしていましたが、今回の発表を見ても、総合的な学習の時間を小学校でも随分と利用されているなと思っていました。中学校だって、総合的な学習の時間で「環境」をやっているところがたくさんあるわけです。

そうだとしたら、もっと出やすいというか、学級ごとに出ているものもありました。そこで、総合的な学習の時間の発表は学校ごとですと思うので、そのまま終わらないで、

その中で、特に優秀とか特にすばらしかったという班や学級での取組を募集したらいいのではないかと思うのです。

そうすると、小学校は200校、中学校は100校あるのですから、仮にその10%が応募してくらたら30校は出てきますね。

そういうことを考えて、ある意味、小・中、場合によっては高も入れてもいいのではないかという感じも受けました。その中でいいものを伝えていって、子どもたちに、中学生になったらこんなことやるぞ、高校生になったらこんな取組をするぞみたいなものにしていけると、裾野がどんどん広がっていったり、自分の発表したことがさらに励みになっていくのではないかと思います。そして、数がどんどん広まってくるようになれば、今度はテーマ別にするとか、こちらからお題を出すといえますか、例えば「フードロスについて」今年度はやりますよとか、今は「温室効果ガス」だと思いますけれども、温室効果ガスを減らすのにみんなで取り組むことは何だろうみたいな、テーマに基づいた環境発表もできるのではないかと思うのです。しかし、まずは、先ほど述べましたように、数を増やすということですね。今はちょっと少な過ぎると思います。例にあげたような工夫をしていただき、コンテストに出やすくするということが必要ではないかと思いました。

○大沼会長 裾野を広げる工夫はもういろいろあるということですが、教育担当の吉田係長から補足ございますか。

○札幌市教育委員会（吉田企画担当係長） 様々難しい問題も絡んできているところですので、学校現場の先生たちと相談しながらなのかと考えております。

こども環境コンテストについては、先ほどお話ししたエコアクションの出口として、一つの発表の場とした活用を教育委員会からも周知をさせていただいているところです。やはり、子どもたちが学習したことや、活動したことを主体的に発信できる場があるというのは本当にありがたく、貴重な場だと感じているところです。

今年度に関しては、事前収録を取り入れながら、学習したことについてそのまま発表できるという一つのきっかけになったと感じているところです。

ですので、7月の学習でも12月に発表することができることや、子どもの学習や学校の教育課程のタイミング等に合わせることなど、学校現場としてはそういったことをトータルで考えて、どこに子どものピーク、意識を持ってくるのかという視点で整理した上で、一つの貴重な場として位置づけていけるよう、教育委員会としても周知を工夫していきたいと考えております。

こちらについても、今年度、少し方法を見直しながらというところがありますので、さらに検討を重ねて、一緒に考えさせていただければと考えております。

○大沼会長 ありがとうございます。

今、年間通じての子どものピークの持っていく方という話を聞いて、はっと思いました。学校では、運動会のピークがあり、学芸会のピークがあり、その波を先生方はつくるのに非常にうまくバランスを取られながら、もちろん、これを教えなければいけないというこ

ともちゃんとやりながらですので、教育委員会と学校の先生、もちろん環境教育の担当部署、また我々も連携できることあればいろいろ進めていきたいと思います。

オンラインの松田委員、松田ゼミでエシカル消費についてのワークショップを開催されているというご紹介をいただきましたけれども、この点について補足いただいてもいいですし、ほかの点でもいいのですが、お願いできますか。

○松田委員 ゼミではなくて、科目として取り組んだのですけれども、1年間通してエシカル消費に関して、学生が自らの課題をもって解決に向かっての取組をしていったというところで、環境プラザさんにプロジェクトパートナーとしていただいて、共催に至ったという経緯がございました。

4年生の活動でしたので、もうそろそろ卒業で終わりなのですが、これを引き継いで、次年度、今の3年生が今度はフードロスに関して扱って継続していければという話がたまたま会議に出ていました。環境プラザさん、もしくは環境教育に関するところで学生とともに新たな学びの場をつくっていければなと思っております。

関係の皆様、ありがとうございました。

○大沼会長 ゼミ生さんは毎年いろいろテーマを持って取り組まれているということで、頼もしく、ありがたく思いました。ありがとうございました。

昨日、環境推進費のほうで、2030年のほうにフードロスも動くという話をされていて、これもタイムリーなテーマですので、ぜひお願いいたします。

エシカル消費という連想ですと、有坂委員、いかがでしょうか。

○有坂委員 エシカルで振っていただきましたが、私はフェアトレードタウンさっぽろ戦略会議の事務局長もしていますので、その関わりかと思えます。

少し別のことになってしまうかもしれないのですが、エシカル消費を考えてもそうなのですが、子どもたちだけが学ばばいいというわけではないのです。学校ばかりに負担がかかるというのは本当にそうだと思うので、学校ももちろん大事だけれども、それ以外の機関でどういうことをしていくべきなのかということも併せて考えていかなければいけないと思っています。

この場では、環境教育、学校でどうするかという話が多いと思うのですが、そこは少し違った観点で、今日の感想になってしまうかもしれませんが、人材育成という場合に、学校教育だと教員も対象だと思います。例えば、こども環境コンテストをされるときに、先生方が引率されて来るのが大変だという話でした。例えば、生徒と先生を全く分けてしまって、先生たちが情報交換できるような場を一緒に設けるということをしているのでしょうか。

というのは、私たちのRCE北海道道央圏協議会では、毎年、全道の高校を対象とした高校生コンテストというものをやっています。

さっぽろこども環境コンテストと同じような感じで、それぞれの取組をまとめて発表してもらおうのですが、授賞式のあとに、参加者が交流する場を設けています。先生たちが交

流する場も設けるのですが。そうすると、先生たちがお互いにどうやって進めているのかという情報交換ができるので、非常に好評をいただいています。

実は、コンテストの審査員が50名以上います。企業の方、行政、大学の先生とか、様々なセクターの方に審査員をしていただいているので、その人たちと先生たちとか、その人たちと生徒の皆さんというふうに、なるべく多様な立場の人たち、価値観を持っている人たちが交流をすることによって、いろんな視点に気づいて、それは若いからということではなくて、その場にいる全員が学び合えるような仕掛けをつくるようにしています。そういったことがもう少しあるといいのかなと思って聞いていました。

学校教育だけではないというか、それこそ環境問題をどうするかということが環境教育や環境学習だと思います。環境問題は、まさに今、危機的な状況になっているので、子どもたちの成長を見守ることはもちろん大事だけれども、今、大人たちが何をするのかという姿を見せることがすごく重要です。大人がやらなければいけないことだと思っています。そこをどうするのかということをお場でも少し議論できるといいのかなと思いました。

○大沼会長 非常に重要な指摘かと思えます。札幌市環境教育・環境学習基本方針の改定をするときにも全く同じ議論が出てきていて、子どもが学ぶ、学校の先生が教えるだけではなくて、全ての市民がという形に持っていかなければいけないのではないかと。

今、お手元に「環境教育・環境学習ガイド」があると思えますけれども、見開きの紹介の中で、真ん中に目指す将来像というところがあって、②は「市民が」という主語にしているのです。市民が自ら行動を選択し、周囲の人たちの行動にもよい影響を与えるということです。まさに有坂委員がおっしゃったことをやりましょうということが議論されてこの基本方針ができた経緯がありますので、そこにも目を向けるというお話は非常に大事かと思えました。

○先名委員 今、有坂委員のお話も、皆様のお話も、大変感銘を受けながら聞いていました。私の立場の視点で感じたことをお話ししたいと思えます。

まず一つ、札幌市も、新年度よりコミュニティスクールをできるところからというレベルで始めていく、と伺っております。

北海道内の地域の方々から、コミュニティスクールに関しても色々な発表を聞いて回ってきているのですが、札幌市は遅れている印象があります。ほかの地域のほうがすごく進んでいるのです。その代わりに、地域のほうは町内会がなくなってしまったり、PTA自体がもう存続できなくなっている状態で、代わりにコミュニティスクールとかほかの分野の活動が積極的になってきていました。

その上で、皆さんの色々な今回の環境に関する報告もそうですけれども、子どもたちを巻き込もう、巻き込もうとすると、とてもエネルギーの要ることであり、それを持続すると考えると結構大変な面が考えられます。

ですから、有坂委員も言ったように、コンテストに参加したことによって、自然にそれ

に関わったら色々な人とつながることができるとか、出会うことができるとか、それが子ども同士であり、専門家と子どもであったり、社会人と親であったり、そのような仕組みのほうにこれから力を入れていかないと、イベントを打ち上げ花火のように、やっっては終わり、やっっては終わりでは、継続的な発展にはつながらないと感じておりました。

また、環境人材の育成に関しましても、実は、子どもも学びたいのですが、そのほかに学びたい大人（保護者）も結構いますので、大人も一緒に学べるようなメッセージがどこかにあればなと思いました。

先ほどのノンカーボン資料もそうですけれども、親御さんに向けた一言メッセージもあっていいのかなと感じております。今のままですと、どうしても子どもが保護者に手渡した後、保護者はそのままどこか定位置の場所に置いたまま山になり、最後には時間経過とともに忘れ去られておりますので、その辺り、すぐ子どもが渡した際に、親も「はっと」感じるようなメッセージがあるとよいなと感じて聞いておりました。

皆様の意見は、親の視点としてもあらためて気づくことが大変多くありましたので、皆さんの専門性の持った方々がそれぞれの専門を大事にしながら、子どもを真ん中にして話し合っているというのは、私としては大変すばらしい場だなと思っております。で、この空気をぜひ外にも派生できるようにしていけたらなと感じております。

○大沼会長 まさに、環境学習・環境教育の基本方針の③で、様々なチャンネルで場と機会を充実させることの重要性、つなぐ、紡ぐという感じだと思います。それから、親とか学びたい人たちは、実はあちこちにいるので、そこをうまくつないでいくといいのではないかな。その具体的な仕組みをどうするかというところが、我々、札幌市の環境政策課さん、教育委員会さん、環境プラザさんにもぜひお力添えをいただきたいと同時に、我々もそういう場をちょっとでもつくっていったらというお話だったと理解しております。

○先名委員 もう1点、教育委員会さんにも、環境プラザさんのほうにも、色々な発表の場で子どもたちが発表するとすごく刺激があって、その発言には責任も伴って、自己有用感も高まると思うのですが、それ以外に審査の中で、「協力」と「協働」という言葉がありますけれども、仲のいい子同士の協力で優勝するぞ、何か特別賞を獲るぞというのも大事ですが、我々で言う「協働」という、意見の合わない、違う方も、好き嫌いのある子もいたとした中で、最後は一緒に同じゴールを目指して発表に「つながった」という過程が、もし審査の中で見えるのであれば・・・。

どうしても、映像の発表となると、映像の編集にたけた先生の学校のほうが見栄えがいいのです。それによって、対面発表と映像発表の差も出てくると感じますね。場を広げるという意味では私も賛同しますが、今後、映像の審査と対面の審査の差もつけていただけたら嬉しいなと感じました。

○大沼会長 大事な要望が出てきたと思います。自己有用感というお話と、集団、集合としての協力とか協働というキーワードが出てきたと思います。

コンテストの審査項目に何か協働・協力体制みたいなものを入れられますか。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 今までにない視点ということもあるので、考えさせていただければと思います。

○大沼会長 可能な範囲でお願いします。

大事な視点だと思います。発表のときのチームワークというのは、確かに見ていて感じるところはあると思うので、そういう言い方ができるかもしれないと思いました。

西塚委員の北ガスさんにはずっと長年クリック募金とかのご協力をいただいていますけれども、この点でもほかの点でも結構です。

○西塚委員 先に札幌市さんにご質問ですが、環境広場の評価と課題をお伺いしたいです。

北海道、札幌市を代表する一大イベントとしてずっとやってこられた中、特に今年度はG7札幌 気候・エネルギー・環境大臣会合との連携で、大変な成功を収めたと思います。コンテンツも充実させ、ご苦勞があったということも見受けられて、心から敬意を表したいと思っております。

様々な団体さんと話をしても、今年度は非常によかったという話を聞いております。特に、子どもたちにとっては、いろんな業界の専門性が活かされたコンテンツが1か所で提供されるイベントは本当に大きな価値があるもので、継続してやっていただきたいと思っています。

その上で、コロナ禍もあって、参加企業や団体様も少し減少傾向があったり、今回はG7との連携があったので、今まで出ていない企業さんが多く出ていました。でも、全体を見ると、団体様のほうは多いのですけれども、民間企業は少なくなってきたという印象を受けました。動員や開催の時期などについてもいろいろ課題があると思いますが、総括的にお話をいただければと思います。

○大沼会長 では、ここで区切って、環境広場さっぽろですが、今年はG7もあり大盛況だったということですがけれども、協賛企業が減ってきているのではないかというお話です。

事務局から、この点について現状や状況、あるいは今後の取組策などがあればお願いいたします。

○事務局（阿部環境政策課推進係員） ご質問をいただき、ありがとうございます。環境局環境政策課の阿部と申します。よろしく申し上げます。

私は、昨年度環境局に異動してきて、去年3年ぶりに復活した環境広場さっぽろ2022の取りまとめと、今年度、環境広場ほっかいどうについてはG7の会合だったということで、ちょっと実行委員会主催だったものですから、環境局の出展の取りまとめをしていまして、ご指摘いただいたとおり、3年ぶりの開催ということで、昨年度に実施した環境広場は出展者数が減ってしまいましたし、来場者数も減ってしまいました。ここは、環境広場さっぽろ2022が7月30・31日開催だったのですけれども、ちょうどこの辺りがコロナの確か第7波か何かの直前でして、ちょっとまだ自粛、自粛のムードの中で開催中止する、しないみたいな判断もあったり、そして、出展者の方におかれまして、何とかこの3年ぶりに復活して、環境広場をやりますという周知が若干ちょっと遅れてし

まったということもあったので、出展者様の準備の期間とか、うちの周知が足りなかった、そして、コロナで2年間、ちょっと我々もオンラインで何とかつないではおったのですが、やはり企業様も予算の確保がどうしてもできず、一旦予算がなくなってしまった、回収されてしまったということがあって、我々としては3年ぶりに何とかできたのですが、ちょっと悔しかったという思いがありました。

今年度の環境広場ほっかいどうについては、G7の会合自体が4月15日、16日で先に決まってしまったものですから、我々の環境広場さっぽろとして、環境局としては、子どもたちがメインで、その家族と一緒に来ていただいて、一緒に学んでいただく、楽しんでいただく、お家に帰っていただいた後も学んでいただいたことをやっていただくということで、行動の変容につなげていきたいという目的があるものですから、環境局としては、4月15日・16日、また年が明けましたので、今年、同じような時期にやりたいとは全く思っていないくて、例年夏休みの土・日、何とか開催したいということで、今まさに、その調整をしておるところでしたので、企業様にはなるべく早く周知をさせていただきまして、我々のほうも出展者数の増加で魅力あるコンテンツを何とか用意をして、なるべく早く子どもたち、学校にもPR、訴求をしていきたいと思っております。

回答になっているかどうか分かりませんが、今、まさに目下調整中でございます。北ガスさんには、いつもお世話になっております。引き続きご協力を賜ればと思います。

○西塚委員 民間企業として予算の編成スケジュールに鑑みますと、できるだけ早いほうがよいですね。既にこの時期は予算編成期の終盤だと思っておりますので、より子どもたちにとって有益なイベントに昇華していくためには、できるだけ早く時期や方向性を決め、時期はできれば夏休みがとていいことだと思っております。

それから、前の章で、バス事業が運転手不足や観光需要の増大等がある中で、事業自体を持続的に行っていくために乗り越えなければいけないハードルは、どのようなことがあるのでしょうか。少し早めにバスの予約を抑えたりすることなど対策はあるでしょうか。

資料の表にはございませんが、弊社のLNG工場の見学も、コロナが明けて、次年度以降、また受入れをさせていただけるような準備を進めております。対策があると、見学の再開を予定されている各所の皆さんにとっても有益な情報になると思われました。

○大沼会長 ありがとうございます。

資料4ページの校外学習バスですが、このご時世、運転手不足ということで非常に残念だったということですが、事務局のほうで、受入れの側としては北ガスさんをはじめ、民間のほうも体制を整えつつあるというお話ですが、こちらの時期の問題とか、あればよろしくをお願いします。

○事務局（谷内環境教育担当係長） 4月に新年度が始まってから、各学校に募集をかけて、その中で抽せんをして、5月ぐらいに学校を決めて、この学校が参加予定なので、入札に参加したい企業さんをお願いしますという形で進めてきました。そうなってくると、契約を始めるのがもう5月とか6月になってしまうものですから、ほかの同様の事業と比

べて出遅れてしまうのではないかと考えております。

そのため、次回については、例えば、学校への募集を今年度内に済ませてしまって、年度の初め、来年度の予算を執行できる4月にはこの学校が参加しますよと決まった状態で入札に進むと、一、二か月早く動き出しができるのではないかと考えております。

また、学校の委員にお尋ねしたいのですけれども、今年度の2月中に来年度はこういう施設に行きたいという希望を取ることは、やっても問題ないのでしょうか。

○野崎委員 基本的に、前年度中であってもできると思います。実際にプラネタリウムだとか、前年度、次の学年の前に予定をかけて日程を決めるということはありません。

あとは、僕はこの事業を続けてほしいのですが、学校としてもスキー学習等でバスを取っても、直前になってほごにされるのが最近続出しています。結局、バスが取れないのです。1年前に約束していてもキャンセルを食らったりします。バス代も2倍近く上がっていて、スキー学習も、今まで年2回、学年で行くということも考えていたのですが、今のうちの学校は1回ずつです。ご家庭への負担もすごく大きくなってきていると思うことが多くて、知り合いの学校は3月にスキー学習に行くと言っていました。バスが取れないからです。

という現状を考えると、環境の絞った中ですがけれども、うちの特別支援級の先生もこれで勉強させたいとか、いろんな思いを持っていらっしゃるって、こういうふうに使いたいという人は学校の中にいっぱいいますので、ぜひこの事業は何とか続けていただければなと思っていました。

○事務局（谷内環境教育担当係長） どうもありがとうございました。

○大沼会長 ニーズとしては非常に強くあるということで、時期を少しでも早めることで何とか対応したいということで、関係者の皆様には、バスの運転手問題は連日ニュースになっていますけれども、その中で何とかやりくりができたらなと思います。ありがとうございました。

それでは、石澤副会長から、今日の全体のことで個別のことで結構ですので、お願いいたします。

○石澤副会長 石澤でございます。

今日は、環境教育が改めて生涯教育であり、決して子どもだけではなく、私たち札幌市民、大人も子どもも、どのように学ぶのかということについて、とても前向きに多様な視点からお話が出たのではないかと思います。

コロナが明けて、今、とても活発にいろいろなことが動き出しています。教育現場ではコロナ禍には資料から学ぶことがとても重要だったのですが、現在は外に出て学ぶ機会も増えてきています。ますますこの資料をどう活用していくかということを考えていくことが必要ではないかと感じました。

先ほど、デジタルデータ等を含めて、ICT活用が進んできている移行期だというお話がありました。

今、小学校教科書が4年に1回の改訂時期に当たって、2024年度から教科書が替わります。札幌市教育委員会では、今時期、教育課程の例として『指導の手引』を作成しており、最終校正に入っているぐらいではないかと思えます。指導案やその授業の展開は、それぞれ担当されている方が作成されております。

そこで、環境教育のために作成された資料の全てデジタルデータとしてあるとしたら、各教科の担当者に一度それらを見ていただきたいのです。社会科・理科・生活科・家庭科を始め、あらゆる教科の中で「これを使えるぞ」というところが必ずあると思えます。資料として活用できる場合には、『指導の手引』の単元や題材のそのページに、ダイレクトに検索できるように二次元コードを載せる作業を付け加えてほしいです。すると、『指導の手引』完成後は、各先生はそれをご自身のノートブックとかクロームブックで検索すると、すぐに使える資料として授業に活用できます。授業準備の時間も短く、資料活用は、さらに進むと思われれます。

作成されている資料がどのくらい活用されているのかが、この会議でも毎回話題に上がりますが、活用を促す手立てとして、今、まさに実現できるのではないかと考えます。

先ほど机の上に資料があふれ使いづらいと話題になりましたが、最終的には、毎年毎年紙面で配布されている資料も、デジタルデータとして活用されていくことが、環境面でも優れているでしょう。

デジタルコンテンツへの移行期ということで、できることは何かと思って、皆さんのご意見をお聞きしながら考えていたところでした。

本日は、皆さんの専門や日頃お考えの視点から、様々な改善や貴重なご意見がたくさん出され、私自身も刺激を受け大変勉強にもなりました。心から委員の一員として参加させていただいてよかったなと感じております。本日はありがとうございました。

○大沼会長 生涯学習とか、いろいろ資料の活用の仕方ということかと思えます。ありがとうございました。

ほかに、どうしてもこれは言っておきたいとか、資料の中身について確認しておきたいということはありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○大沼会長 では、議事は以上にさせていただきたいと思えます。

以上をもちまして、議事は全て終了となります。

本日は、今期最後の委員会となりますので、よろしければ、皆さんから一言ずつ、2年間委員をお勤めいただいたことになると思うので、その2年間の総括というか感想をいただけたらと思えます。

石澤副会長から順にお願いします。

○石澤副会長 私は今、この会に参加させていただいたお礼をしまして、感想も述べさせていただきました。

2年間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

○野崎委員 いろんな立場の方々からの学校に対して求めていることや期待を毎回この会議に参加するたびに思っています。毎回、頑張らなければと思って帰ります。今日もそんな気持ちにさせていただきました。

2年間、ありがとうございました。

○三浦委員 2年間、ありがとうございました。

私も、同じ職種の方以外の専門的ないろんな立場で、または保護者の方のご意見も含めて、そういうことを聞きながら、子どもたちの教育は学校だけでもなかなか難しくなっています。学校ができることは限られてしまっているのです。専門家の方、地域の方、保護者の力を借りながらやっていきたいと思っています。そういう意味では、この会で2年間、本当に勉強させていただきました。どうもありがとうございました。

○伊藤委員 コロナの関係で4年間お世話になりました。ありがとうございました。

来るたびに、学校を困らせるようなお話が多かったのではないかと思うのですが、決してそうではなくて、札幌市民全体の環境教育になっていけばいいなという思いで、余計なことばかり申し上げて申し訳ありませんでした。

今後とも未来の地球のためによろしくお願いたします。ありがとうございました。

○久保田委員 私も、コロナの関係で2年ほど長引いて、4年間お世話になりました。本当にありがとうございました。

最後に感じたことを手短にお話しさせていただきます。

私、いろいろな話を聞いていまして、今、一番最後に環境教育・学習について思うことですけれども、札幌市立の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で様々な環境についての学び、取組が進んでいるのだろうと想像しています。

ここに一部をこう見ただけでも、本当に様々な取組が進んでいます。

ただ、その上で話をするのですけれども、やっぱり一番大事なことというのは、やっぱり学校の現場では教育の質をいかに高めてこれからもいくかということに尽きるのではないかなというふうに思うのです。それが、この四つの取組の中の一番の一つの環境教育の推進の一つのゴールの形だと思って聞いておりました。

これは、決して子どもにとって難しいことをするというのではなくて、別の言葉で言えば、子どもが主体的に環境について自分たちの身近な問題として考えて学んでいくということになると思うのです。

そのときに、先生が一方向的に教えるのではなくて、子どもたちが自分たちで課題を見つけて主体的に自分の身近な問題について学びを深めていくということが大切だと思うのです。環境学習というのは、身近なテーマが本当にいろんな切り口であるのです。だから、学びを深めようと思うと、大人だけじゃなくて、子どもも様々な観点で考えることができる本当にいい教材なのです。

でも、残念ながら、学校は教科が縦割りになっていて、学際的な分野を扱っているところが多いので、先生方も自分の専門のところだけに目を向けていると、そこまで目配りが

いなくて、子どもたちに今のトピックな環境学習がなかなかしづらいということもあると思うのです。ですから、学校の先生には、現場で子どもに接するのですから、教科横断的に、いろんな先生で協力して、チームを組んだりして、子どもたちにいい教育をしてほしいと思うのです。

こういうことが進んでいくと、皆さんからいろいろ出ていましたけれども、副教材の活用も、それを使って調べるということも進んでいくだろうし、そういうことが学校に広がって質が高まっていけば、さっきの環境コンテストじゃないですけども、そこに出て、自分たちの活動をぜひ聞いてほしいというふうに発表する学校も増えてくるだろうし、みんな連関していると私は思うのです。そういう部分がまだ弱いのではないかと思います。

それを来年以降、いかに高めていくかということを考えていくことがこの委員会では大事なのではないかなと思って聞いておりました。

○山本委員 1年間というか2回だけですけれども、ありがとうございました。

子どもが学校から持って帰るものが、こういった議論の場の末、出てきたものということがよく分かって、本当に勉強になりました。

前回は今回も一方的に好き勝手申し上げたのですが、本当に前回申し上げたことをしっかりと改善していただけて、本当にこの会議は大事なのだなということを実感しました。来年度からも有意義な議論がされることを、子どもが持って帰るものから察したいと思います。ありがとうございました。

○西塚委員 環境という言葉一つ取っても、非常に幅広い課題がありますが、教育現場の皆さんや行政、関係の皆さんのご苦労があつて、いろんな取組が進んでいることに、改めて心から敬意を表したいと思います。

それぞれの企業、団体で、環境教育への貢献というのはそれぞれ方針があると思いますが、我々の業界を含めて、とりわけ最近ではカーボンゼロにする、カーボンニュートラルという言葉が叫ばれてきておりますので、そこで子どもたちが自分事として考えられるような情報提供、場の提供はより一層重要になってくるのだと改めて感じました。

また、大人がどう子どもに関わっていくかということも重要だと再認識しました。2年間、どうもありがとうございました。

○先名委員 皆様、大変お疲れさまでした。

私もPTAになって初めてこういう場に参加させていただいて、こういう世界があるのだなという驚きとともに、感謝の気持ちのほうがたくさんあります。

専門性を持った方々が、本当に各専門の内容を大切にしながら、子どもを真ん中に、こうやって話し合っていたら、なおかつ対話して、探究して、対話して、探究するという、この繰り返しを続けているこの場が、定期的な評価であったり、検証を行う場という形として、本当に大切だなと思いました。今回は年2回でしたけれども、年3回あってもいいのかなと感じておりました。というのは、自分の中では、皆様のお役に立つまでの自分の引き出しを開くまでに時間がかかり、もう1回あるともうちょっと引き出せたかなと

感じたところでした。

大変お世話になりました。ありがとうございました。

○有坂委員 なかなか参加することができなくて、言いたいことだけ言って、いつも申し訳ないなと思っています。E S D、持続可能な開発のための教育を推進するという立場になってもう15年以上になっているのですけれども、皆さんが今お話しされているように、子どもを中心とはふだん考えていないです。正直に言って、子どもたちも一つのプレーヤーというか関係者であって、みんな対等だと思っているのです。教える、教えられるという関係ではなくて、釈迦に説法みたいな感じだと思いますけれども、子どもたちから教わることもあります。E d u c a t e は引き出し合うという意味があると言われてますけれども、まさにそういうことだと思っていますので、特に子どもというふうにはあえて言わずにふだんは活動しています。

この場は、子どもを中心にしていて、逆にすごく新鮮です。子どもの教育は大事なことであるとももちろん分かっているので、そういったことを中心に話をするというのも、新たな発見があって、私自身、学びの多い場になっていました。

そんな中でも、自分の立場としては、大人がもっとしっかりしなければ、そこをどうするかということをやっぱり考えていかないといけないなと改めて思わせてくれるような場だったと思います。

2年間で1回ぐらいしか出席しておらず、あまり協力できませんでしたが、お世話になりました。ありがとうございました。

○松田委員 ありがとうございました。

そもそも野外活動だとか、自然体験とか、そういったところで、フィールドに出て環境教育を行う実践者がうちの学会、多いのですけれども、その中でよく出てくるのが、安心して環境教育ができるように、というのが、最近、キーワードになっています。特に、ヒグマの件がありますので、沢だとか川に行くと、やっぱりその辺、危険性があるということを取りやめたりするという事も出てきています。

本来的にはその現場に行って、その環境で何を学ぶのかというところで、環境教育を推進したいのだけれども、なかなかできないというところもあるので、その辺を踏まえて生物多様性とか自然との共生を学べるような、そんな安心して環境教育ができるような場をどうやってつくるのかを我々もう1回検討しなければならないなというところが、今、学会の中で強く議論をされているところかと思います。

来月、ヒグマをテーマに学会で会議を行いますので、もしよろしければお越しいただけるとありがたいなと思っております。

2年間、どうもありがとうございました。

○坂本委員 お疲れさまでした。

この委員会は、もちろん札幌市の環境教育の方針を推進するという大きなミッションがあって集まっている場だということは理解しているのですが、やはり、さっき有坂委員も

おっしゃったように、学校教育、子どもに何かを教えるとか評価するとか、そういう枠の中だけで環境教育は考えてはいけないと思うので、先生や、学校の立場もあるけれども、それ以外の地域にいろんな人がいる、いろんな専門の人たちも力を合わせて地球をよくしていく、地域をよくしていくということを子どもたちにも伝えたいと思います。

そういう意味で、何人かこの集まり自体がいろんな分野の人や立場の人の意見を聞いて、ためになったとおっしゃっているのを耳にして、何か、決める場ではなくて、いろんな情報共有の場としてもこういう委員会があったらいいのかなと思いました。

私たちのところも、去年ぐらいからリアルな学びをどんどん再開していて、もちろんオンラインの場も否定はできないと思っているのですが、リアルな自然とか生身の人間から学ぶことは本当に大きいので、うちでもいろんな受入れをしていますので、もしよろしかったら、ぜひ余市にも足を運んでいただけたらうれしいです。

ありがとうございました。

○大沼会長 どうもありがとうございました。

最後に、会長からということで、私も感想を少し申し上げます。

私自身、環境配慮行動というものをずっとテーマの一つとして扱ってきた身として、理解とか学びとは何だろうと思っていたときに、やっぱり知識だけということではなくて、手足を動かして初めて腑に落ちるとか理解した感覚になるというのはあると思っています。その意味で、もちろん教材もすごく大事だし、大量の情報がきちんと整然と整理されることももちろん大事ですけども、触るとか、手足を動かす、時には危ないということもちゃんと理解する、もちろんヒグマが出なくても、虫に刺されたり、植物にかぶれたり、川に入れば溺れるかもしれないし、火をつけたらやけどするかもしれない。そういった一つ一つの手足を動かして危ないということを通じて学ぶことが本質的に結構大事なのではないかと思っています。コロナ禍の何年かの間、体験しないで、情報のインプットだけで育った子どもたちがどうなっているかというので、今、そういうふうな育った大学生を相手にしているのです。

何が問題になったかというのと、去年の夏、4年ぶりぐらいに、ジンギスカンパーティーをやったのです。学生20人ぐらいいて、誰一人炭に火をつけられなかったのです。僕は、これは笑い事じゃなくて大事件だと思っていた、もちろん彼らは、非常に瞬時に検索をするし、ChatGPTを使わなくても瞬時に要約つくってくる頭いい子なのだけでも、手足動かせと言われたときに何一つできないのです。本当にそれがいいのかということ常々、大学生と向き合う現場として考えています。

さらに、私自身もこの委員会の場で、小学校、中学校の先生方や様々な活動をされている方、また、企業の方、いろんな観点から取り組まれている方の話を聞きながら、学びが非常にあったところがございます。

それから、私自身、こちらの会長も4年間務めさせていただきまして、多分、私が一番勉強させていただいたと思っております。いつも、司会が下手くそで、時間管理が下手で、

今日も時間がオーバーしてしまって本当に申し訳ございませんでした。皆さんの貴重な時間をうまくコントロールできず、力不足でご迷惑をおかけしたことを最後にお詫びしたいと思います。

事務局に戻したいと思います。よろしく願いいたします。

○事務局（飯岡環境政策課長） それでは、事務局からご連絡をさせていただきます。

本日の会議で、今年度の委員会は最後となりますけれども、この委員会の任期は、令和6年の4月まででお願いしているところでございます。次期委員の就任のお願いにつきましては、改めて個別にご相談させていただきたいと思っておりますので、その際はどうぞよろしく願いいたします。

以上でございます。

3. 閉 会

○大沼会長 以上をもちまして、令和5年度第2回札幌市環境教育・環境学習基本方針推進委員会を終了いたします。

本日は、長い時間にわたり、また、活発なご議論を最後までしてくださり、ありがとうございました。

以 上